父親の誕生

フランソワ・モーリヤックの小説における父息子の関係[1]

福田 耕介

家長としての父親の誕生

「もし十八ヶ月の時に信仰のない父を失う代わりにカトリックの母を失っていたら、今日の自分がどんな人間になっていたかは想像もできない。」(III, 892[2]) とフランソワ・モーリヤックは、1939 年刊行の『逃れさる家』の中に記している。この言葉が、母親から受け継いだ信仰が彼の人生に及ぼした影響の計り知れない大きさを言い表していることに間違いはないが、この想定の焦点を「カトリック」という点にのみ絞ることのできないのも本当である。というのも、1910 年代の前半に書かれた最初の二つの小説、『鎖につながれた子供』と『青年の白衣』において、モーリヤックは確かに父親の代わりに母親が早世した家族構成を主人公に与えているのだが、その時父親の信仰の有無が取り立てて問題に付されることはないからだ。つまり、本格的に小説に取り組んだ二十代後半のモーリヤックの中に脈動していたのは、1939 年の言葉から信仰という要素を取り除いた時に残る「父親の代わりに母親が早くに亡くなっていたら」という一層単純な想定なのであり、それこそが少なくとも初期のモーリヤックの小説執筆を支えた重要な力であったと考えることができるのである。

---

[1] 2007 年 6 月 22 日、23 日にボルドー近郊のマラガールで行われた第 21 回フランソワ・モーリヤック国際学会における発表の前半部分を書き改めたものである。なお、発表の全体は、*Nouveaux Cahiers François Mauriac* 第 16 号（2008 年 6 月刊行）に掲載される予定である。

[2] モーリヤックの作品からの引用は原則として次の五巻のプレイヤード版による。
Œuvres romanesques et théâtrales complètes, édition établie, présentée et annotée par Jacques Petit, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », tome I-IV, 1978-1985.（略号：I, II, III, IV）
Œuvres Autobiographiques, édition établie, présentée et annotée par François Durand, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1990.（略号：V）
引用の出典は、引用の直後に括弧でくくって、巻数を表す略号（ローマ数字）とページ数（アラビア数字）とを示すことにする。

もちろん、「私は父親を知らないという不幸に決して慣れることができなかった。父が亡くなった時、私は二十ヶ月だった。神の摂理によって何週間かの猶予が与えられていたら、父を思い出すこともできたのだろうが。」（V, 69）と『ある人生の始まり』の冒頭に記しているように、モーリヤックは自分の父親のことを憶えてはいない。それゆえ、最初の小説『鎖につながれた子供』で、母を赤ん坊の時分に失くして母の記憶を持たない主人公のジャン＝ポール・ジョアネが父ベルトランの養育を受ける設定をした時、モーリヤックは、「かなり農民的[3]」であると同時に、息子のジャン＝ポール・モーリヤック(つまりはフランソワの父親)に家業を優先して学業を断念させる家長でもあった祖父のジャック・モーリヤックを連想させる、農民的な家長としての父親を創出する。「ランゴンの階段の上で、父方の祖父は唇に笛を近づける。食事の時間なのだ。私は四歳だ。」（III, 908）と『逃れさる家』に書いているように、この祖父のことはモーリヤックの記憶に残っていた。モーリヤックの小説に登場する父親は、大きく二つの範疇に分けることができるのだが、その第一のタイプとなる家長の役割を果たす父親がここに誕生したのである。

ただし、結果的に祖父の記憶に結び付いた父親ベルトラン・ジョアネを生み出したこの最初の小説において、それにも拘わらずモーリヤックが自分の「知らない」父親を強く意識していることを見落としてはならないだろう。第一に、繰り返すまでもないことであるが、主人公にはジャン＝ポールというモーリヤックの父親と同じファーストネームが与えられている。つまり、「父親が生きていたら」という仮定は、主人公の父親にではなく、息子の位置を占める主人公自体に託された可能性も残されているのだ。この点については、後に触れなければなるまい。

第二に、家名のジョアネもまた、プレイヤッド版の編者ジャック・プティが「マラガールよりも一層大切なものであったランドの所有地の名前[4]」と「解説」に書いているように、モーリヤックの家族が父方から引き継いだ土地の名前であり、モーリヤックの父親と結び付いている。ただ、その「ジョアネの森の奥深いところに道をつけて」、『フロントナック家の神秘』の舞台ともなる「別荘（chalet[5]）」を建てさせたのは、モーリヤックの母クレール・モ

---

[3] Jean Lacouture, *François Mauriac 1. Le sondeur d'abîmes 1885-1933*, Editions du Seuil, « Points », 1990, p. 26.

[4] Jacques Petit, « Notice », I, 1003.

[5] Mauriac, *Bloc-notes tome IV 1965-1967*, présentation et notes de Jean Touzot, Editions du Seuil, « Points Essais », 1993, p. 495.

ーリヤックであり、ジョアネはモーリヤックにとって何よりも母親と過した時間を思い起こさせる場所となっていく。主人公の家名には、既に父と母とが不可分に混在し始めているのだ。

第三に、新たに指摘してみたいのは、『鎖につながれた子供』というタイトルに秘められた可能性である。ボルドーの市立図書館に保存されている1871年のジャン＝ポール・モーリヤックの日記の11月7日の頁に『捕らわれのライオン』という題の自作の詩が本人の手で書き写されている。その詩の中で、「鎖につながれた（chargé de chaînes）」という同じ形容句が、普仏戦争でドイツに敗れた父親のライオンを修飾するものとして使われているのである。捕らわれた父親は、自分に代わっていつか息子たちが至る所で勝利を収めてくれることに期待をかける。確かにモーリヤックがこの詩を目にしていたと確言することはできないが、「私は父が下手な詩を書いていたことを知っている」（III, 895）と『逃れさる家』に記す時、モーリヤックが「下手な詩」として、今に残されている『捕らわれのライオン』を思い浮かべていた可能性は充分に高いと推察されるのである。

父親の詩とは逆に、モーリヤックのタイトルで、「鎖につながれた」のは「子供」である。そして、既に見たようにその子供にはいみじくもジャン＝ポールという父親の名前が与えられている。つまり最初の小説において、タイトルと父の名前という二つの絆によって作者の父ジャン＝ポールにぴたりと重ね合わされた主人公が、パリに出た時に作者が置かれていたのと同じ状況を生き始めていることになる。モーリヤックの小説世界の開始する地点には、父が「文学」を通して息子の中に生命を得て、息子の生活を生きていたらどうなるのか、という想定が刻み込まれているのだ。

母親の死

だが、タイトル、主人公の名前という二つの指標から推定される父親との一体化の意図は、結局のところ、作者の自伝的な事実という小説の外の部分に存在するものに留まり、作品の内側に展開することはなかった。それどころか、実際に小説中に描き出された父と息子は、互いに理解し合うことのできない全く異質な存在とならざるを得なかった。父ベルトランが友人のジュール・バルゾンに向かって、「ジャン＝ポールがどうするつもりなのか、私にはわからない…ああ、とても愛想が良くて、とても礼儀正しい子なんだが。でもあの子は本を読んできた。学があって、詩人なんだ…自分の息子が異邦

人みたいに私を怖気づかせるとは。」と「農民的な諦めた仕草」（I, 65-66）で語るところに、そのことがよく表れている。

息子は「本を読む」と書かれているように、父と息子の乖離する根本にあるのは「文学」である。つまり、自伝のレヴェルではモーリヤックと早世した父親を結ぶ紐帯となった「文学」が、虚構の次元では父と息子を隔てる要因に逆転しているのだ。しかも、逆転はそれだけに留まらない。ジャン＝ポールの文学趣味は、「ミュッセの戯曲やジョルジュ・サンドの小説」（I, 66）を読んでいた母親の遺伝に帰されているのであり、「文学」が父の遺伝から母の遺伝へと置き換えられているのである。そこには、父親と母親の死の順序を入れ替えたことにも劣らない、モーリヤックの世界の核心に触れた転倒がある。果たしてモーリヤックの小説世界で、「文学」が母と息子との間で共有されることは稀である。『海への道』のレオニー・コスタドのように、盗み読んだ息子ピエールの詩に対して抑えがたい憎悪を覚え、そのノートを「破いてしまいたいという恥ずべき欲求」（III, 556）を抱くことの方が、むしろ通常の反応となるのだ。

『鎖につながれた子供』と並ぶ例外と考えることのできるのは、1951 年に出版された『醜い子』である。「私の書いた中で最も完成度の高いもの」（IV, 995）と作者の評するこの短篇では、「物語」が母と息子を結ぶ絆となっていた。そのことについては既にいくつかのところで論じた通りだ[6]。だがその時にも、夫の体を髣髴とさせる息子の醜い体は、母親の嫌悪を誘わずにはいなかった。それに対して、およそ 40 年前に書かれた『鎖につながれた子供』の世界では、母と息子の一体化は外貌という身体の次元にまで推し進められて、より完全なものとなっている。父のベルトランが写真を手に取ってジュール・バルゾンに語る、「見てごらん、ジャン＝ポールは母親に生き写しだよ。私は息子もまた理解できずにきたのだ。」（I, 66）という言葉が、端的にそのことを言い表している。文学を志向する精神を共有するのみならず、肉体的にも「生き写し」と言われるほどに母は息子の上に存在しているのである。

この母と息子の表情の類似は、作品の冒頭近くで鏡と写真という小道具を駆使して、効果的に表現されている。別のところで述べたことなので詳しくは繰り返さないが[7]、鏡を見て「悲しげな」（I, 7-8）目で微笑むことによって、

---

[6] 特に次の拙稿を参照のこと。« Deux images maternelles et l'héritage du père dans *Ce qui était perdu* et *Le Sagouin* » in *Nouveaux Cahiers François Mauriac*, no. 12, Grasset, 2004, pp. 171-182.

[7] 拙稿「読書する「二人の若い女性」―『鎖につながれた子供』におけるモーリヤックの主人公の原体験 ― 」、『lilia candida』第 32 号、白百合女子大学フランス語フ

「悲しげな微笑」（I, 8）を浮かべる写真の中の母親に自分を重ね合わせたジャン＝ポールに関して、「マルトに会いに行こうと考えて、すっかり青ざめた繊細な顔に唇で触れる喜びを前もって味わうのだった」（I, 8）と書かれている。この時、母と同一化したジャン＝ポールは、母親から遠ざけられるという原体験を共有するマルト・バルゾンに接吻することで、自分自身の心の傷をも癒そうとしている。父親が誕生し、母親の早世するこの処女小説において、徹底して目指されているのは自分を遠ざけた母親との距離を縮めることなのであり、文学が母に移植されているのも、そのことで文学を志向することと母を志向することとが同義になるからに外ならない。その源流にあるのは、死によって中断された断片『マルタヴェルヌ』を待ってようやく語られることになる、息子を「押しのける」（IV, 839）母親の仕草であるに違いない。この小説家が全作品を通して克服しなければならなかった傷が、ジャン＝ポールをマルトへと向かわせる力となっているのだ。

つまり、冒頭に掲げた『逃れさる家』の一節に込められた「父の代わりに、母を亡くしていたら」という仮定によって実現可能となるのは、逆説的なことに、父との一体化ではなく母との一体化なのである。小説に取り組み始めたモーリヤックが、小説の中で母と息子の距離を詰めることを考えた時に、何よりも必要としたのが母親の死だったのだ。主人公がジャン＝ポールという作者の父親のファーストネームを名乗っていることは、父との同一化の指標ではなく、「父」とペアになるのは当然「母」であるという論理によって、「母」が目指されていることの指標となるのだ[8]。そこにはさらに、父と母を結ぶ絆であり、モーリヤックの小説の本質的な課題である「結婚」というテーマが潜在している。これから論じていくように、そこにまた父親の誕生の要請された理由も見えてくるのである。

父親と結婚の関係に入る前段として、家長として誕生した父親に見られる特徴を確認しておこう。モーリヤックの描く家長の特徴は、家族の構成員に自分の決定を絶対として課して躊躇わない点にある。ベルトラン・ジョアネが存在感の希薄な父親であることは否定できないが、それでも専横な家長としての資質は確実に彼の内にも萌している。例えば小説の冒頭には、パリに住む息子にベルトランが「田舎の屋根裏部屋に打ち捨てられていた古い家具」

ランス文学会、2002 年、17-38 頁。

[8] J.-M.バターユが既に、父の死に最も近い時期に生まれた末の子のフランソワは、「亡くなった者の場所を占める」のだと論じている。J.-M. Bataille, « La chambre de la mère » in *Présence de François Mauriac*, Presses universitaires de Bordeaux, 1986, p. 135.

（I, 3）を送りつけたと書かれている。ジャック・プティも指摘するように、現実にはモーリヤックの母親が「いくぶんか彼の意に反して[9]」家具を送りつけてきたのであり、ボルドーに留まる母親がパリに解放された息子の生活に田舎の秩序を持ち込もうとした振舞いが、父親に委託される形で直接小説の中に取り込まれているのである。

また、妻のことも息子のことも理解できずにいながら、理解するための努力を惜しんで甘んじてその状態を受入れてしまっていることもベルトラン・ジョアネの特徴となっている。同じ小説の中で、例えばマルトはジャン＝ポールの伴侶となるために、彼の好きな本を読もうとしているし、マルトの父親バルゾン氏に至っては妻を理解するために妻の手紙を盗み読むことさえ辞さなかった。ベルトランには、そうした異質な存在に接近しようとする努力が根本的に欠如している。その意味で、彼は既に「自分自身の殻から出て、相手の見ているものを見ようとする努力を知らない」（II, 76）ベルナール・デスケルーを予告する家長となっているのだ[10]。

結婚の周旋

家長としてのベルトラン・ジョアネは、小説の後半部分においても、息子の不在裏に息子に関する重要な決断を下している。即ち、マルトの父親と相談して、ジャン＝ポールとマルト・バルゾンとの結婚を決めるのである。モーリヤックの小説に描かれる最初の結婚は父親の力添えを得て実現に至るのだ。1911年にマリアンヌ・ショーソンとの婚約を一方的に破棄されたモーリヤックは、『三十歳の男の日記』の草稿に付された紙片に「私は若い女性たちに恐怖を与える人間なのだ」（V, 948）と書き付けた。婚約破棄の記憶のまだ新しかった『鎖につながれた子供』執筆時のモーリヤックにとって、外的な力に誘導されて結婚へと至る筋道は、結婚できないのではないかという執拗

---

[9] Jacques Petit, « Notes et variantes », I, 1011.

[10] 農民的父親の専横な態度が鮮明になるのは、第三作『肉と血』においてである。小説の冒頭では、神学校を諦めた息子クロード・ファヴローに対して母親以上の理解を示していた父親が、作品の後半で突如「自分自身に絶対的な信」を置き、「神託のように聞き入れられることを要求する」（I, 307）暴君へと豹変する。エドワール・デュポン＝ガンテールの自殺を阻むために駆けつけようとする息子を、この父親が暴力的に部屋に閉じ込めたことが、エドワールの自殺を防ぎ得なかった大きな要因となっていることは疑いを入れない。エドワールもまた、父親との確執から父と訣別した息子であり、クロードの父親は、父の秩序に背いた息子は死に追い込むことさえ躊躇わない家長の横暴を初めて十全に体現した父親となっているのである。

な強迫観念を克服する有力な方策として、虚構の中で夢想されているに違いないのだ。何よりも重要なのは、その時にこの結婚の斡旋という恩寵の源に、母親ではなく、父親の設置されなければならなかったことである。母の早世と同時に、父親の誕生が要請されなければならなかったのは、恐らくそのためである。

実際、モーリヤックのその後の作品において、母親が息子に結婚を周旋することは皆無に近い。母親は、むしろ反対に専ら息子の結婚の障害となる。その代表的な例は『癩者への接吻』の中で「もしフェルナンが結婚したら、嫁は死ぬことになるだろう。」（I, 456）と予言したフェリシテ・カズナーヴであり、その予言は『ジェニトリクス』の中で、嫁のマチルドの孤独な死によって現実のものとなっている。『海への道』の中では、レオニー・コスタドが次男のロベールとローズ・レヴォルーとの婚約を巧みに破局へと導く[11]。さらに『ありし日の一青年』では、通例に反してガジャック夫人が息子のアランのために、自分の愛するジャネット・セリスとの結婚を按配しようとするのだが、ジャネットは「プー（虱）」と渾名されるまでにアランの嫌悪を誘う少女であり、母によって夢見られたこの結婚の実現することはない。「そしてプーとカップルにすることで、母はこの息子を予め生贄として捧げていた。頭の中で既に息子を生贄として捧げてしまっていたのだ。」（IV, 725）とアランは書いている。モーリヤックの最初の小説において父親は息子の望む結婚の実現を助けるための決断を下すことができた。それに対して、最後の小説でようやく母親が息子のために婚約者を選んだことは、息子の人生の歯車を大きく狂わせるだけの結果に終るのだ。

今や父親に、母親とは違って、息子が漠然と望んでいた結婚を斡旋する能力の備わっていることは明らかだ。だが、そこにはさらにもう一段階の屈折がある。つまり、望んだ結婚にも拘わらず、息子には父の仲介を経た結婚に

---

[11] 同じ小説の中で、もう一人の母親リュシエンヌ・レヴォルーは、例外的に次男のドゥニと、彼らの土地の管理人の娘イレーヌ・カヴァイレスとの結婚を認めている。だが、彼女の母性愛が長男のジュリヤンによって独占されていたことを見落としてはなるまい。じじつ、次男がブルジョワではない娘と結婚することを受け入れる際に、彼女はカヴァイレス一家から「マリアがこれからはジュリヤンの面倒を見る」（III, 673）という約束を取り付けていた。マリアとは嫁となるイレーヌの母親である。つまり、死の近いことを予感したリュシエンヌにとって、ドゥニの結婚は、ジュリヤンに代理の母親を確保する最良の手段に外ならなかったのだ。また、新婚の夫婦の傍らには、通常結婚の障害となる母に代わる存在として、ドゥニの姉であるローズが控えていて、新婦の絶望の「原因」（III, 704）となっている。フェリシテがマチルドに対して果たした不吉な母性の役割もまた、一種の代理の母によってしっかりと担われているのである。

よって幸福になることが許されていないのである。父親に結婚を斡旋される息子の代表的な例は、『癩者への接吻』のジャン・ペルエールと『宿命』のプリュダン・ゴルナックであろうが、二人に共に妻を残して早世する運命の与えられていることは偶然ではない。『癩者への接吻』では、結婚によって家庭に入ってきた妻ノエミが夫への肉体的嫌悪によって衰弱していくために、ジャンは家庭に居場所を失って、最初はパリへ、次いでピユション医師の結核を病んだ息子の枕元へと自己を追放し、自らを死へと追い込んでいく。ジャンの死が目的としているのは、ノエミを夫婦の絆から解放することだけではない。重要なのは、互いに傷つけ合って疲弊していく若い夫婦の傍らで、ただ老いた父親ばかりが生命を謳歌していることである。息子の中に「苦しんでいる自分自身の似姿、脆弱な自分の影」（I, 450）を見て子離れできずにいた老父が、嫁の中に遂に息子の代わりとなる理想の伴侶を見出したのだ。息子の結婚は、息子が父に世話をしてもらった妻を父に譲り、空白となっていた父の伴侶の場所を埋め合わせる結果に終る。それと同時にノエミには、彼らの夫婦関係において厄災としかなり得なかった性的関係の可能性の限りなく希薄な一種の夫婦関係が遺贈されることにもなっているのだ[12]。

『宿命』においてもその事情は変わらない。ジャン・ゴルナックは「全てにおいて父親に服従していた」（II, 131）息子のプリュダンにエリザベート・ラヴィニャッスとの結婚を世話する。だが「松林、葡萄、大地」という「宗教」（II, 132）によって緊密に結ばれることになったのは、エリザベートとジャンの方であり、事業のために有能な嫁を必要とする父に愛するエリザベートを譲る形で、プリュダンは孤独な死を死ななければならないのである。

『鎖につながれた子供』では、息子の結婚生活の描かれる以前に小説は終結するのだが、息子が結婚を世話してくれた父親に恩義を負う関係は既にそこに潜伏している。この小説の結末で、マルトとの結婚を決意したジャン＝ポールが新婚生活を想像しながら、「彼の周囲を漂うマルトの微笑み、花瓶の中の取り替えられた花、揺り篭のベールの下の笑い声と涙」（I, 78）を思い描く場面に着目してみよう。彼の想像する未来の夫婦生活において、妻が夫に微笑み、花瓶の花の交換に代表される家事が適切に成され、さらには揺り篭の場所が両親の傍らに確保されていることは、取るに足りない細部では

[12] ジョン・フラワーの指摘するように、年取った男性と若い女性という組み合わせには、「第一次世界大戦で体が不自由になった男と結婚した」マリアンヌ・ショーソンの影を透視することができるだろう（John Flower, « François Mauriac, Marianne Chausson, les fiançailles rompues et “un adolescent d’autrefois” » in *L’amitié, ce pur fleuve...*, L’Esprit du temps, Bordeaux, 2005, p. 337）。

ない。というのも、それこそがまさにマルトとジャン＝ポールのそれぞれの両親の達成できなかったことに外ならないからだ。何よりも彼らの母親が、「自分の子供を同じイギリス人の女中に預けると、田舎の古いサロンの涼しいところに避難して、順番に『アンディアナ』を読み合っていた」（I, 18）ことが重要である。つまり、子供ばかりでなく夫もまた、二人の母親の籠もるサロンからは追放されていた。やがてこの二人の妻の早い死によって、夫二人は決定的に妻を失うことになるのだが、「子供時代の共通の思い出を持つ」（I, 46）彼らの友情に満足して、二人が再婚を考えることはない。この二組の男女においては、明らかに夫婦の絆よりも結婚以前から存在していた友情の絆の方が優先していた。言い換えるなら、結婚に踏み切ったにも拘わらず、彼らは女同士のカップル、男同士のカップルという枠を越えることができなかったのである。ジャン＝ポールは、マルトと協力して、家庭の中に男女の組み合わさった尋常なカップルによる家族の秩序を打ち立てて、不十分だった彼らの両親の家庭を建て直さなければならない。特に、離れて引きこもる母親たちを前にして無力だった父親二人の過誤を償わなければならない。父親二人が、ジャン＝ポールとマルトを組み合わせることの内に含ませた暗黙の期待をジャン＝ポールは確かに受け止めている。

逃亡する父親の誕生

家長として誕生した父親は、母親には託されることのない結婚の斡旋という責務を息子に対して果たすことができる。しかし、それにも拘わらず、息子の結婚には不十分だった父親が予め暗い影を落としている。そのため、第二作から早速、正反対の父親像の模索される必要が生じる。続く『青年の白衣』では、田舎に留まって家業を取り仕切る「家長」とは全く逆に、画家という天職を全うするために「タヒチの夜の未曾有の青」（I, 106）を求めて、病弱な妻と幼い息子を置いてタヒチへと移り住む父親が創出されるのだ。モーリヤックの生み出す父親は大きく二つの範疇に区分できると既に述べたが、その第二のタイプとなる家庭を放棄する父親の最初の姿である。母が程なく病死したために、残された息子のジャックは孤児として祖母に育てられる。十二歳の時に異国で父親が亡くなって、初めてジャックはそれまで父親の生きていたことを知らされるのだ。

ベルトラン・ジョアネとジャックの父親との違いは、家長として君臨するか逃亡するかという点ばかりに留まらない。力点は、文学を理解しなかった

ベルトランとは逆に、ジャックの父親が芸術を人生の至上の目的とする人間となったところにも置かれている。そのことで、ジョアネの父息子を隔てていた父親の側の芸術に対する無理解が取り除かれた訳であるが、そのことが直ちに生き延びた父親と息子の距離を縮めることはない。確かに、ジャックはジャン＝ポール同様、文学に関心を持ち、父親の絵画に対しても無関心ではなかった。しかし、ジャックの父親に対する関心から浮かび上がるのは、ここでもまた、息子と母親との類似点となるのである。

先ず、父が一部の人からは高く評価される才能のある画家だったと知った時に、ジャックが「家名」の有名であるか無名であるかという点に多大な関心を示すことに目を留めてみなければならない。「パリの最も洗練された人たちが父の才能を認めていることを私は考えないようにした。［中略］私自身のものではない栄光など望んでいなかった。すぐに私は野心という悪癖の極限に達して、ヴィニーのように「私に栄光とは無縁で渡された名前を有名にしたのだ」と言えないことに苦しんだ。」（I, 171-172）と書かれている。ジャックにとって「芸術」に取り組むことは、「家名」を有名にするという世俗的な名誉に到達することを目的としている。それに対して、父親の方は「どんな称賛も蔑んでいた」（I, 106）のであり、「野心という悪癖」などに突き動かされて絵筆を握っていたはずはない。ジャックの体を流れているのは「上席権の問題」（I, 98）を気に病む母方の血であり、その意味で彼は芸術家である父よりは、大ブルジョワの家名を手に入れようとしてオーギュスタンを踏み付けにする『上席権』の語り手に近いのである。少なくとも「奇妙なことに、世間では大して評判にならなかったこの『マルタヴェルヌ』が、忠実な何人かの読者の心の中に生命を保っていて、その人たちの心臓が鼓動を止めても、それを引き継ぐ者が必ず次の世代に表れるのだ。」（IV, 825）と書くモーリヤックの最後の分身アラン・ガジャックの感覚からは、ジャックはまだ程遠いところにいる。

次に、父親との決定的な差異として、ジャックには父親の絵画を本当には理解することのできない点もまた見過ごしてはなるまい。父の絵画の展示を見た時のことを、ジャックは「父の名誉のために、明確に定義されたタイトルを与えるまでは一枚の絵の前を離れないようにした。断念しなければならなかった。猿と女性を見分けることが不可能だった。動物たちが、ブリキでできた玩具のようだった。」（I, 175）と記している。父の絵の前で困惑し、絵を鑑賞するというよりは、言葉で「定義」することで自分の秩序の中に取り込もうとする姿勢は、明らかに「青しか見ることのできない一枚の絵を前

にして他の人たちと同じように笑った」（I, 106）母親の属していたブルジョワ家族の無理解な態度の繰り返しとなっている[13]。

恐らくはジャックの父親もそのことを予感していた。十六歳になったジャックの読むことを許された遺言の中で、父親は「私の知らない息子よ。私は現実の外へと逃げ出したことで死んでいく。［中略］お前は生きなければならない。お前の知らない全ての風土に増して、その家、その葡萄畑、そしてお前の母さんと私が草に絡め取られた小舟の中で笑ったその池を愛さなければならない。」（I, 142）と語っている。自分がタヒチの夜へと船出したことを棚に上げて、「草に絡め取られた小舟」で満足するようにと父親は息子を説得する。ここでも息子は、父親とは逆に、保守的なブルジョワ家族の出身だった母親の血に従うことで、家庭よりも未知の風土を好んだ父親の過失を償わなければならないのだ。

『青年の白衣』の結末では、カミーユの父である叔父の蕩尽のせいで、ジャックは祖母の死によって相続したウジランヌの土地家屋を売却せざるを得なくなる。ウジランヌを去る際に、ジャックは「失われた私の少女よ、私は再び道を辿る。一日、一日と私はお前の方へと向かう。この世で引き離された我々の手が、動かなくなった我々の胸の上で、同じ仕草に組み合わされる時刻まで…」（I, 192）と別れたカミーユを想像して語りかけている。妻子を捨てて二度と戻ることのなかった父とは逆に、息子は子供時代を共有した従妹のカミーユを再び見出すことを人生の目的としなければならない。換言するなら、出奔したジャックの父親と蕩尽したカミーユの父親という、二つの父性によって崩壊を余儀なくされた彼の子供時代の土地であるウジランヌを、それと同時に母と父とが共に笑い幸福な一時期を過ごした場所でもあったウジランヌを、ジャックは再建しなければならないのだ。そのことで、ウジランヌを崩壊させた二人の父親の過失を償わなければならないのだ。第二の逃亡する父親と息子の最初の関係の中にも、第一の「家長」である父親と息子の関係に見られた、父の過誤を償う息子という図式が命脈を保っている[14]。

---

[13] ジャックは父に劣等感を抱かずにはいられなかったはずであり、その点をポール・コークが論じている。Paul Cooke, « The Paternal reverie in Mauriac's 'mémoires imaginaires' » in *French Studies*, volume L, no. 3, July 1996, pp. 302-303.

[14] 逃亡する父親と、その父に対する息子の償いとが最も明確に結び付くのは、第四作の『上席権』においてである。この点に関しては次の拙稿で詳しく述べた。「モーリヤック『上席権』における秩序と冒険 —— 留まる母親と捨てる父親」、『白百合女子大学研究紀要』第 41 号、2005 年、79-98 頁。

父親の誕生は、いずれの場合にも弁済しなければならない債務を息子に負わせずには済まないのである。

モーリヤックは未完に終った最後の小説『マルタヴェルヌ』の中で、老いた主人公アラン・ガジャックの全著作に通じた青年ジャン・ド・セルネスをアランが養子にする構想を抱いていた。モーリヤックの小説は、このように、ある意味で二つの父親の原型の創出によって開始し、『マルタヴェルヌ』における血の絆ではなく精神的な絆で結ばれた息子の誕生に至って終結する。父親の創出から息子の創出へと至る父息子の関係の移り行きこそが、モーリヤックの小説世界をその周囲に結晶させていった、モーリヤックの小説世界の核に外ならないのである。